

「瓦版」



2024. October. 1

在仙台カンボジア王国名誉領事館

No.20

仙台二華高校で行っているカンボジアにおける課題研究の活動内容を7回シリーズで紹介しております。

仙台二華高校では、毎年8月（雨季）と12月（乾季）の2回、メコン川フィールドワーク（以下 FW）と称してカンボジアを訪問しています。課題研究のグループはシエムリアップを対象としているものだけでも雨水、バイオトイレ、水質、教育・エコ容器の4グループがあり、FWに参加した生徒は宇宙飛行士さながら、他のグループから依頼された調査を次々にこなしていきます。

第3回は「バイオトイレグループ アンコール・クラウ村におけるトイレ問題」をご紹介します。

～バイオトイレグループ アンコール・クラウ村におけるトイレ問題～

私たちがシエムリアップで活動する際にお世話になるのがカンボジアで NGO 登録をしている「JST: Joint Support Team for Angkor Community and Development（アンコール人材養成支援機構）」です。代表のチア・ノル（Chea Nol）さんはポル・ポト政権下で父と2人の兄を失い難民として来日、大学卒業後の1994年、日本国政府アンコール遺跡修復チームの一員として14年ぶりに故郷の地を踏みました。チームでは、近隣の村から多くの農民を遺跡の修復作業のために雇いましたが、彼らの出身地の一つがアンコール・クラウ村です。当時アンコール・クラウ村は鬱蒼とした森の中で、きちんとした道や橋もなく病人が病院に行くにもひと苦労だったそうです。アンコール・クラウ村は、アンコール王朝の首都アンコール・トムから地方へ行くときの最初の宿場町です。東海道五十三次でいうと日本橋から見た品川宿のような位置づけです。私たちが初めてこの村を訪問した2014年当時村には電気がなく、ホームステイをした際には真っ暗な中で満点の星を心行くまで堪能することができました。

この村を2回目に訪問した2015年8月、第3回メコン川フィールドワークから帰国した生徒の一人が撮った写真を見て驚きました。何と延々とトイレの写真が写っていました。当時、1回のフィールドワークで40軒くらいの家庭で調査をしていたのですが、この生徒は訪問したタイ、カンボジアの全てのトイレの写真集を作っていたのでした。これを機に俄然トイレに注目が集まりました。2015年12月の第4回フィールドワークでは、欲しいもののランキングを作成しましたが、トイレはどこの家でも上位に入っていました。この村は遺跡に近いため、トイレを作ろうと穴を掘ると、遺跡らしきものが出てきます。従って、当局の許可なしにトイレを作ることもできません。そのため、トイレがある家庭は10%もありませんでした。人々は藪に分け入って用を



アンコール・クラウ村
家は森の中



インタビューの様子



代表的なトイレ



学校での実験の様子

足さなければなりません。夜は暴漢に襲われる危険があったり、蛇や他の動物にも気をつけなければなりませんでした。

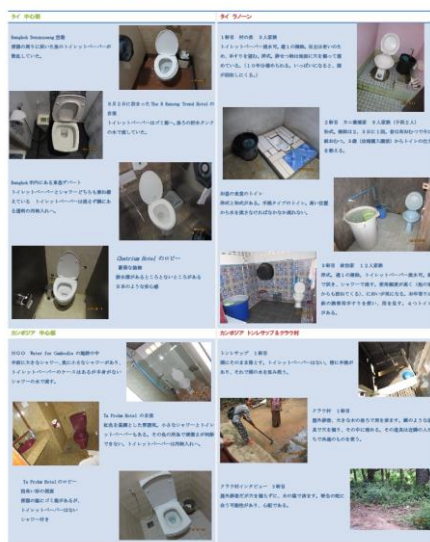
人々はトイレが欲しいのに作ることもままならない、この状況を何とかできないかと生徒たちは考えました。「富士山頂にはバイオトイレというものがあるらしい」。調べてみると、バイオトイレというのは最先端のトイレで、災害時にも活躍しているらしいことが分かりました。微生物の力で排泄物を分解し、分解された排泄物は肥料として用いることができます（コンポストと同じ好気性発酵の原理です）。これは水が常に自由に使えるわけではなく、やせた土壌で野菜をつくるのにも苦労している村の人々のためになる！とみんなでこのアイデアを称えました。バイオトイレ班が組織され、手始めに馬糞を使っておがくずやもみ殻、腐葉土などを用いて試行錯誤を繰り返しました。目的の好気性発酵が起こると温度が50℃を超え、熱くなることで発酵が進んでいることが確認できます。当然ですが失敗すると腐敗してすごい臭いと共に大量のハエが発生します。学校の中で、臭い臭いと苦情を言われながらもなんとか場所を見つけて実験を繰り返しました。最先端のトイレを、現地にあるものだけで安価に制作し、字の読み書きができない村人がメンテナンスができるように改良に改良を重ねていきます。モルタルをこねて、実際の大きさ・形のトイレを校庭に建てたりもしました。近くにあるバイオトイレを見学するためにみちのく杜の湖畔公園やゼロ村牧場バカラッチョ！！も訪問しました。

そんな中、第9回（2018年夏）のフィールドワークで村を訪問したら、何と電気が通っていました。きちんと国際支援とはこういうものだとは頑張ってきたつもりが、ちょっと残念に思う気持ちもあって、注意はしていてもやはり自分たちの都合を優先する気持ちがあったんだなあともみんなで反省したことを思い出します。早速村で欲しいものの調査をすると、案の定トイレはずっと下の方になっていました。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、…いわゆる三種の神器ですね。また、村では現金収入を得にくいので、町で働くためのバイクが一番となっていました。ところが、2022年12月、コロナ禍で通えなかった2年半の後訪問した際、村にはなんと多数のトイレが設置されていました。村の人に聞いてみると、コロナ禍で仕事がなかった人々が、なんと自力で次々と建てていったようです。「なんだ〜、できるじゃん」と、国際支援とは何とも複雑なものだと改めて感じました。

最近では自力でトイレを建てるのが難しい、さらに貧しい隣村への導入を目指して頑張っています。

タイ・カンボジアのトイレの比較

国際協力、海外派遣、社会貢献



トイレの比較(村のトイレは右下)



モルタルをこねて、



基礎を作り、



校庭に建てたトイレ！

みちのく

陸奥あれこれ・・・ 松島

宮島、天橋立と並び日本三景の一つに数えられる松島。

松尾芭蕉は奥の細道の中で「松嶋の月まず心にかかりて」と記しており、当時から知られた風光明媚な場所です。

松島は260余の島々からなる多島海です。湾内には大小の遊覧船が就航しており、船上より島々を眺めることができます。船上からカモメに餌やりをするのが名物になっていましたが、糞害により松が枯れ始めたことから2014年4月1日より湾内での餌やりは禁止となっています。25～50分ほどの複数のコースがあり、ルートによって浅く穏やかな湾内の内松島と外洋の外松島の波の様子や風景の違いを楽しむことができます。



松島湾の正面から延びる参道は、国宝・瑞巖寺です。正式名称は「松島青龍山瑞巖円福禅寺」といい、現在は臨済宗妙心寺派に属する禅宗寺院です。9世紀初頭、慈覚大師円仁によって開創された天台宗延福寺がその前身とされています。慈覚大師は天台宗第三代座主で、世界三大旅行記のひとつ『入唐求法巡礼行記』の著者としても知られています。松島 瑞巖寺、平泉 中尊寺、平泉 毛越寺、山寺 立石寺の開祖とされており、これら四寺をめぐる旅を「みちのく古寺巡礼 四寺廻廊」と称し、人々の信仰を集めております。

松島を歩き疲れたら、観瀾亭へ。この建物は文禄年中に豊臣秀吉から伊達政宗が拝領した伏見桃山城の一棟で、江戸品川の藩邸に移築したものを二代藩主忠宗が一木一石変えずこの地に移したものと伝えられています。藩主姫君、側室等の松島遊覧、幕府巡見使等の巡視の際の宿泊、接待用の施設「御仮屋」として利用されていました。お抹茶を頂きながら遊覧船が出航していくのを眺めることができます。

